

# 地域連携による効果的な保健師教育を目指して (第1報)

～公衆衛生看護学「肝付町学外演習」からの一考察～

八田 冷子<sup>1)</sup>, 柿元 美津江<sup>1)</sup>, 塩満 芳子<sup>1)</sup>, 能勢 佳子<sup>2)</sup>

## 要 旨

本学においては、平成27年度から、それまでの統合カリキュラムを選択制とし、保健師教育の軸として、公衆衛生看護学の講義、保健所実践・市町村保健センター実践・福祉組織実習等を行っているところである。平成27年度、本学保健師領域選択者を対象に、全保教のミニマム・リクワイアメンツを活用した達成度評価において、実践実習による達成度が大きいことが確認できた。

この実践実習をより効果的に行うことが保健師教育を行う上でも重要である。しかしながら4週間という限られた実習期間であり、実習期間中に学生が経験できる地区活動はそれぞれの実習場における保健師のフィールドワークの実施状況等により差もみられている。

このため、過疎高齢化が進む中、地域の実情に応じた様々な保健活動等を行っている肝付町と連携し、町保健師等の協力を得、H集落に出向き、地域住民にインタビュー等を実施、住民と協働した地域づくりや地域特性に応じた保健活動の展開を学ぶため、公衆衛生看護学の一環として「肝付町学外演習」を実施した。

その結果、学外演習の意義や効果として①個別課題から地域の健康課題を把握し、課題解決のための方策を考えるという保健師活動の一連の流れを体験し、公衆衛生看護実践の理解につながる②地域の特性や社会資源の把握など地域診断の重要性、様々な「連携」の在り方について考える機会となる③今後の高齢社会において、住みなれた地域で安心して暮らすことを支援するために、保健師としてどのように取り組んでいくか考える貴重な機会となることが示唆された。

**キーワード：** 地域連携、保健師教育、公衆衛生看護学、学外演習

## 1. はじめに

保健所実践・市町村保健センター実践実習をより効果的に実施するために、過疎高齢化が進む中、様々な取り組みを行っている肝付町と連携し、町保健師等の協力を得、住民と協働した地域づくりや地域特性に応じた保健活動の展開を学ぶため、公衆衛生看護学の一環として「肝付町学外演習」(以下学外演習)を実施した。今回、地域との連携により実施した学外演習の経緯や内容を振り返りつつ、参加学生のレポート等から、その意義と効果・課題を明らかにする。

## 2. 研究目的

地域との連携により実施した学外演習の経緯や内容を振り返りつつ、参加学生のレポート等から、その意義と効果・課題を明らかにする。

## 3. 学外演習を肝付町に依頼した経緯

### (1) 肝付町の概要

総面積 ; 308.15 km<sup>2</sup>

場所 ; 本土最南端の大隅半島の南東部に位置

気候 ; 平均気温は高山地区で17.0℃,

降雨量は年間2,700 mm以上,

温暖多雨な亜熱帯性気候

人口 ; 16,275人 (平成28年5月1日現在)

男性7,841人, 女性8,434人

出生数 ; 102人, 死亡数 ; 272人,

世帯数 ; 8,240世帯

高齢化率 ; 39.0% (平成26年10月1日現在)

要介護認定率 ; 23.4% (平成26年10月)

年齢3区分人口の割合 ; 年少人口10.8% (県内39位)

生産年齢人口50.3% (県内39位)

老年人口39.0% (県内3位)

### (2) 保健師配置や活動

肝付町保健師は、6名体制で管理期3名が保健センター、中堅若手保健師3名が地域包括支援センターに配置されている。その中で、介護保険制度創設時から高齢者支援に関わり、地域包括支援センター等の立ち上げや、地域包括ケアシステム構築に尽力してきた保健師を中心に、地域包括支援センターに配置されている保健師たちは、広さと集落が点在している地域で、地域も人と同じで年を重ね、「集落の看

1) 鹿兒島純心女子大学看護栄養学部看護学科

2) 肝付町地域包括支援センター

取り」という大きな課題に向き合いながら、そこに暮らす高齢者の地域の自己決定を支援している。一方で、ITを活用し、孫に負けたくない高齢者のiPad講座などユニークな取り組みも行っている。黒子に徹しながらも高齢者自身の力と意欲を引き出し、地域の様々な人材の力をプロジデュースする町保健師の活動は全国的にも高く評価されている。

(3) 学外演習実施の経緯

本学においては、平成27年度から、それまでの統合カリキュラムを選択制とし、保健師教育の軸として、公衆衛生看護学の講義、保健所実践・市町村保健センター実践、福祉組織実習等を行っているところである。平成27年度、本学保健師領域選択者を対象に実施した、全保教のミニマム・リクワイアメントを活用した達成度評価において、実践実習による達成度が大きいことが確認できた。

この実践実習をより効果的に行うことが保健師教育を行う上でも重要である。しかしながら4週間という限られた実習期間であり、その期間中に学生が経験できる地区活動はそれぞれの実習場における保健師のフィールドワークの実施状況等により差もみられている。

このため、過疎高齢化が進む中、地域の実情に応じた様々な保健活動等を行っている肝付町と連携し、町保健師等の協力を得、H集落に出向き、地域住民にインタビュー等を実施、住民と協働した地域づく

りや地域特性に応じた保健活動の展開を学ぶため、公衆衛生看護学の一環として「肝付町学外演習」を実施した。

4. 学外演習の目的・内容・スケジュール

(1) 目的

鹿児島県においては、高齢化が全国より進み、離島へき地も有しており、その地域特性に応じた保健活動が展開されている。そのような中、肝付町の保健活動や地域づくりの取り組みは、全国的にも評価されている。900年の伝統を受け継ぐ流鏝馬神事やJAXA内之浦宇宙空間観測所等もあり、その地域力やICTを活用した取り組み等がなされている。また、町外からのボランティアや研修生の受け入れにも積極的であり、施設等も充実している。

過疎高齢化が進む中、様々な取り組みを行っている肝付町において、フィールドワーク等の学外演習を実施し、住民と協働した地域づくりや地域特性に応じた保健活動の展開を学ぶ。

(2) 期間：平成28年6月3日～6月4日

(3) 学外演習対象者

鹿児島純心女子大学 看護栄養学部 看護栄養学科 4年次生 保健師領域選択者 18名

(4) 事前学習

肝付町について、既存の資料に基づいた地域診断を行った上で学外演習に臨んだ。

(5) 学外演習の日程

学外演習の日程

6月3日	学外演習内容	6月4日	学外演習内容
9:00	本学出発 (車中) 肝付町保健師による肝付町の概要・地域特性に応じた取り組み等説明	9:00	高山やぶさめ館出発
11:30	高山やぶさめ館到着 昼食	9:30	JAXA内之浦宇宙空間観測所到着 施設見学
13:00	高山やぶさめ館出発	11:00	JAXA内之浦宇宙空間観測所出発
13:30	H集落農村研修センター到着 オリエンテーション	11:30	高山やぶさめ館到着 昼食
14:00	H集落 6世帯の訪問調査	12:30	「地域ケアを考える仲間たちの集い」 国際医療福祉大学：高橋泰教授講演会聴講
15:00	H集落農村研修センターへ集合	15:00	高山やぶさめ館出発
15:15	ワークショップ 住民代表との意見交換等	17:30	本学到着解散
16:00	H集落農村研修センター出発		
16:30	高山やぶさめ館到着		
18:30	地元企業・農業若手従事者等との交流会・夕食会		
20:00	入浴等		
22:00	就寝		

(6) H集落の概要

肝付町の南端中央部に位置し、肝付町役場から車で片道30分、平成18年3月8世帯21人（高齢化率57.1%・平均年齢62歳）であったが、10年後の平成28年3月現在9世帯13人（高齢化率69.2%、平均年齢73歳）と変化している。集落内に農村研修センターがあり交流拠点となっている。医療・介護資源、商店は身近にはなく、交通手段は1日2回の乗り合いバス・自家用車による。

H集落を学外演習の実施地域として選定した理由として、①連絡が取りやすく、移動距離があまり長くない地域、②学生や教員自身の連絡方法として携帯がつながる地域、③学生を受け入れてくれる力を持った地域、④高齢化率が高いという肝付町の特徴を持つ地域、を選定したと町保健師は後述している。

5. 学内報告会

平成28年6月8日学外演習で得た情報や見聞を分析し、まとめてグループ発表を行った。

肝付町並びにH集落の地区踏査、家庭訪問（日中在宅している6世帯6人）による個別事例の健康課題等からH集落の健康課題・地域の強みが、以下のとおり報告された。

(1) H集落住民の健康調査結果

（「肝付おたっしやおたずね票 H28」を活用）

【表1】肝付おたっしやおたずね票 H28調査結果概要

住 民	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	F氏
年 齢	67	79	84	88	90	97
性 別	男	女	女	女	女	女
健康状態 <sup>1)</sup>	1	1	3	3	2	3
日常生活 <sup>2)</sup>	4	2	3	5	10	9
歩 行 量 <sup>3)</sup>	5	3	3	2	2	4
人間関係 <sup>4)</sup>	0	0	0	0	1	0

- 1) 1. 良い 2. まあ良い 3. ふつう  
4. あまりよくない 5. よくない
- 2) 16項目中支障のある項目数
- 3) 1. ほとんど歩かない 2. 30分未満  
3. 30分～60分未満 4. 60分～90分未満  
5. 90分以上 6. 歩けない
- 4) 4項目中相談したり、相談されたりがないと回答した項目数

(2) 家庭訪問で把握したH集落住民の健康課題

【表2】個別の健康課題

A氏	毎日ほとんど庭や畑で作業をしていて、家の中で暇をすることがほとんどない。また、訪問した際にお話ししている姿からとても元気な方だったので、この日常の活動が健康づくりや生きがいにつながっているのではないかと感じた。
B氏	膝痛が以前からあり、歩行時に転倒したことがある。膝痛がなく体調が良い時は庭の手入れを行ったり、4,000歩～5,000歩散歩する。目が見えづらいため、文字を読むのが億劫になっている。
C氏	近所との距離が離れているため、異変が起きた時に気づいてくれる人がいない。救急車が来るのが遅い。家に段差が多い。高齢で足腰が弱いため移動に時間がかかる。バスがないこと、買い物に行く乗り合いの車も頻度が少ないこと。息子・娘が来ないと買い物に行けない。
D氏	変形性膝関節症で整体通院、高血圧で服薬中。夜眠れないことがあるため精神安定剤服用中。交通手段が少なく、便数も少ないため、不便。病院が遠い。病气によりまた歩けなくなることで、自立した生活ができなくなることが不安。最期までH集落で生活したい。
E氏	家族が体調を崩した時に支援してくれる人がいるのか。現在は歩行に問題ないが、歩けなくなったときの友人との交流方法は、携帯電話を持っていないため、一人で外出した際の連絡手段がない。
F氏	畑仕事が趣味だが、高齢で足が弱いため、長男夫婦が「何もしなくていい」「家にいてほしい」と言っている。料理や掃除はお嫁さんが行い、家にもテレビや新聞を見る時間がほとんどである。近所の交流も毎日だと迷惑をかけてしまうと気を遣っている。

(3) 学外演習を通して把握したH集落の健康課題と強み

学生は、家庭訪問により、個人の健康課題を把握した上で、【表3】のとおり、日常生活を維持する上での交通や仕事や役割についての課題、急病や緊急時・災害時の課題などを考えるととともに、自然の豊かさや自給自足ができ、地域とのつながりや関係性が強く、保健師との距離が近く、元気な高齢者が多いなど、地域の強みを把握することができた。

【表 3】H 集落の健康課題と強み

	地域の健康課題	地域の強み
1 G	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近くに医療機関がないため何かあった時に不安である</li> <li>・ 家の中や自宅周辺で倒れていても、近くに家がないため、何かあった時不安である</li> <li>・ 近くに若い人がいないため力仕事を自身で行わなければならない（水汲みや濾過装置の手入れなど）</li> <li>・ 坂が多く道路も凹凸しているため、歩きにくく転倒しやすい。また、膝痛を増強させてしまう</li> <li>・ 救急車が自宅に駆けつけるまでに時間がかかる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域住民の健康への意識が高いため、予防対策が取りやすい</li> <li>・ 地域住民同士の交流が多いため、孤独・孤立することが少ない</li> <li>・ 自然が豊かでおいしい食べ物が多く自給自足に近い生活をしている</li> </ul>
2 G	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 急変時に気付いてくれる人や支援する人がいない</li> <li>・ 救急車を呼んでも来るまでに時間がかかる上に、近くに病院がないため搬送にも時間がかかる</li> <li>・ 古民家のため、高齢者が安全に生活することが難しい</li> <li>・ バスが通っていないため、交通の便が悪く、家族の協力が必要不可欠</li> <li>・ 地域のつながりは強いが、一軒、一軒の距離が遠い</li> <li>・ 外出時や急変時にすぐに連絡が取れない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 住民の人柄が温かい</li> <li>・ 地域住民の地元愛を感じ、地域の良さを他の人にも伝えたいという気持ち強い</li> <li>・ 水、川、空気がとても綺麗で自然が豊か</li> <li>・ 自給自足をしており、とれた作物を交換するなど、地域とのつながり、関係性が強い</li> </ul>
3 G	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人が少ない（高齢者が多い）・病院が遠い</li> <li>・ 交通が不便（バスがなく乗合バスも便が少ない）</li> <li>・ 仕事・役割がない</li> <li>・ 行事が少ない（年 1 回のごみ拾い）</li> <li>・ 大雨時など道路が狭いことや災害（土砂崩れなど）により、救急搬送に時間がかかる場合がある</li> <li>・ 災害時どのように非難するのか（協力し合えるか、誰が支援するか）</li> <li>・ 災害時情報伝達はどうするのか</li> <li>・ 山水使用のため、大雨の際には濾過機がつまり、水が使用できないことがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自然が豊か</li> <li>・ 水が綺麗で無料</li> <li>・ 空気が綺麗</li> <li>・ 自給自足できる</li> <li>・ 地域間の仲が良い</li> <li>・ 保健師との距離が近い</li> <li>・ 昨年 12 月に携帯電話がつながるようになり緊急時も連絡が取れるようになった</li> <li>・ 議員が住民の声を聞いてくれる</li> <li>・ 農業など自分ですることが多いため、訪問時に元気な高齢者が多いという印象を受けた</li> <li>・ 地域おこし協力隊がいる</li> </ul>

## 6. 学外演習レポートから得られた学生の学び

学生のレポートから (1) 家庭訪問からの学び, (2) 交流会での学び, (3) JAXA からの学び, (4) 講演会参加からの学び, (5) その他の項目に分け整理した【表 4-1, 2】ところ, 以下の結果が得られた。

### (1) 家庭訪問からの学び

①ほとんどの学生が、初めての家庭訪問で緊張したものの H 集落の高齢者に温かく迎えてもらったことに喜びや地域のつながりを感じていた。また、「肝付町について調べていたが、実際に行ってみてわかったことが多かった」「直接話を聞く方が生活が目に見える、地域の方々と触れ合うことが大切」「長年その土地で実際に暮らしてきたからこそ語れる

ものがある」などの学びがあった。

②地域診断について、「地域をよく知るために地区踏査が大切である」また、地区踏査については、「地域に行かないとわからない地域の特性を多く学ぶことができた」「地域を抽象的にとらえるのではなく具体的に一つ一つを細かく見て、自分の言葉で町を説明できるまで知り尽くすこと」「町をアセスメントするためにも、環境や人口構造を把握しておくこと」などの学びがあった。

③家庭訪問で、肝付町が個人の健康課題のアセスメントのため作成した「肝付町おたっしやおたずね票 H 28」により問診を行ったが、「高齢の方にわかりやすく伝えること、相手を尊重した聞き方が



難しかった」「話をより理解するために地域を知ることの大切さを学んだ」「対象者との信頼関係やどんな相談にも対応できる知識が必要だ」などの学びがあった。

- ④保健師活動について、「こんなに住民の方々のことを考え保健師として活動される姿に改めて魅力を感じ、自分も市町村保健師を目指したい」「保健師は地域の方々の思いをしっかりと聞き関係を作ることが必要」「地域住民の方の健康状態の把握や管理、思いを聞く役割がとても大切になることが分かった」「保健師として高齢者が住み慣れた地域で生活できるよう支援を行っていくことが必要」「保健師は物理的環境として地域や気候などの特徴を踏まえた上でのアセスメントが必要」「限られた訪問の中で信頼関係を築くために1回1回の訪問を大切にされている」また、「町を愛している保健師さんから案内していただき、地域の課題だけでなく強みやよいところも多く見つけることができた」などの学びがあった。

## (2) 交流会での学び

「肝付町が人口の確保と農業の担い手の確保や育成のために事業に取り組んでいる」「水稻の研究発表で、地域診断と同じように分析され、よりよい米を作るために努力されていると感じた」「肝付町の農業を活性化するために、高齢の人たちだけでなく、若い年代の人々も活動し新たな提案を行っている。」「地域おこしをしている人や食生活改善推進員等地域のために研究している人を知ることができた。」「参加者が様々な形で肝付町を支えており、役割を持っていると感じた」「様々な職種の方々が地域が良くなるよう取り組み、情報を共有し一致団結し、この連携がまちづくりには必要不可欠だと分かった」などの学びがあった。

## (3) JAXA での学び

「ロケットを飛ばすために地域の人々の協力が必要不可欠」「町にある企業・会社と住民は支えあいの関係にあること」「医療従事者も関係していることを初めて知った」{ JAXA がなぜ内之浦にあるのかという疑問も解け貴重な経験となった。}「ロケット発着時には多くの観光客が来ることで町に活気が出る。住民の理解を得ることが大切」「この演習で一番楽しいひとときだった」「普段全く関わることがないことにまじかに触れることができ特色を学ぶことができた」などの学びがあった。

## (4) 講演会参加からの学び

「地域住民の参加が多く意識が高いと感じた」「人口減少や高齢化、今後の医療の在り方など学んだ」「最期を迎える時どうしたいのかを考える必要がある」

「その人のトータルの人生を下げないような医療・看護を行っていく必要がある」「最期をどう迎えたいか自己決定し、それを周囲に伝えておくことの大切さ」「高齢者の方々が自分らしく生きていくために自己決定を支えていくことが看護者の役割だと学んだ」「死に対して前向きになれた」「鹿児島島の医療や高齢化の現状を知りこれから看護者となっていく上での働き方を考えることができた」「かっこよく老いてかっこよく死ぬため、介護予防をしっかりとし、人間らしく安らかに死んでいきたいと考えることができた」「祖母にも自分はどう生きたいかという事を聞き、家族で情報を共有し、祖母の望む生き方を支えていきたい」などの学びがあった。

## (5) その他

「2日間多くのことを学び、改めて保健師というものがすばらしくやりがいのある仕事だとわかった」「肝付町の歴史や現在取り組んでいる事業などを知ることができ、とても魅力の多い地域だと改めて感じた」「2日間で学内学習では学ぶことのできない多くのことを楽しく学ぶことができた」「今回の学びを今後の実習に活かし、看護者になってからも大切にしたい」などの学びがあった。

## 7. 考 察

### (1) 学外演習の意義や役割

- ①個別課題から地域の健康課題を把握し、課題解決のための方策を考えるという保健師活動の一連の流れを体験し、公衆衛生看護実践の理解につながる。

高齢者が「住み慣れた地域に誇りを持っていること」、交通や買い物に不便を感じながらも「生活を楽しまいいききとしていたこと」「環境が穏やかな人を創ること」集落人口は減少しているが「住民同士がお互いに助け合って生活している」ことを知り、「地域を知る」「高齢者の生きがいや就労の場」「家族の協力」「地域の支援」「保健師の支援」の重要性を学ぶことができた。また、何より「初対面の学生を温かく迎えてもらいうれしかった」と感想を述べており、住民に直接話を聞くことで個人の健康課題から地域の健康課題や強みを把握することができた。

- ②地域の特性や社会資源の把握など地域診断の重要性、様々な「連携」の在り方について考える機会となる。

家庭訪問や地区踏査で、地域に行かないとわからない地域の特性を学ぶことができた。また、交流会において、職種は違っても、肝付町のために様々な職種が一致団結し、情報を共有し頑張っ

おり、「まちづくり」には、保健師のみでなく多くの人々が連携していること、また、JAXAでは、打ち上げに際しての地域住民・医療関係者の役割などを知り、企業と行政、地域住民との連携の重要性を学んだ。このことは地域の特性や社会資源を把握し、様々な「連携」の在り方について考える機会となり、学外演習において楽しい思い出となった。

③今後の高齢社会において、住みなれた地域で安心して暮らすことを支援するために、保健師としてどのように取り組んでいくか考える貴重な機会となる。

高齢化が進む地域住民との信頼関係を築き、住み慣れた地域で暮らしたいと願う住民の思いを実現するために生き生きと活動する町保健師の姿に魅力を感じている。また、講演では、全国と比較した鹿児島の医療や介護の現状や課題を知り、「かっこよく老いて、かっこよく死のう」という先生のメッセージが印象に残った学生が多かった。学外演習で「地域」ということを意識し、住み慣れた地域で暮らし続けたいという住民の声を直接聴いたことにより、講演で自分のこととしても「死」について考える貴重な機会となった。

(2) 今後の課題

平野ら(2012)は、保健師の政策に関する能力と必要な基礎教育の内容を、保健師管理者の意見を基に明らかにしており、必要な教育内容として、「個々の住民に着目した支援の重要性」や「地域を見ることが出来る洞察力」など4つが抽出されている。その実現のためには実習等において地域に出向きフィールドワークを行うことが必須となる。しかしながら、それぞれの実習場における保健師のフィールドワークの実施状況等は様々であり、期間に限られる実習の限界もあり、その補完的なものとして学外演習を導入したところである。

今回の学外演習で一定の効果が得られたのは、肝付町保健師の日頃からのフィールドワークが背景にある。保健所実践・保健センター実践実習等を効果的に行うためにも、現場の保健師のフィールドワークが必要不可欠である。今後とも、基礎教育充実のため、教育機関として自治体と連携・協働しながら保健師現任教育へ積極的に関与する必要がある。

## 8. 本研究の限界

今回、学生の学内報告会並びに学外演習終了後のレポート等を整理しまとめ、学外演習の効果がある程度確認できた。しかしながら、本学外演習がどのように保健所実践・市町村保健センター実践実習につながったかまでは確認できていない。現在のタイトな保健師教育プログラムを効果的に実施していくために、実践実習に役立つ学外演習について今後さらに検討工夫が必要だと考える。

## 9. 謝辞

本学外演習の実施にあたり、協力いただいた肝付町役場能勢保健師はじめ関係者の皆様、H集落住民の皆様、交流会参加者の皆様、JAXAの関係者の皆様、貴重な講演をいただいた国際医療福祉大学大学院高橋泰教授に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 柿元美津江, 八田冷子:「保健師に求められる実践能力の獲得経過を明らかにする」～学生自己評価から講義等後と実習後の到達レベル比較検討～鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 VOL.20 2016.5
- 2) 平野美千代, 佐伯和子, 上田泉, 他:行政機関の保健師に求められる政策に関する能力と必要な保健師基礎教育の内容～市町村に勤務する保健師管理者への面接調査から～, 日本公衆衛生雑誌, 59 (12) 2, 871 - 878, 2012
- 3) 井伊久美子, 荒木田美香子, 松本珠美他:保健師業務要覧第3版, 4-7 2014.2
- 4) 佐伯和子, 麻原きよみ, 荒木田美香子他:公衆衛生看護技術, (株) 医師薬出版 2015.4
- 5) 保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ 全国保健師教育機関協議会版 (2014) - 保健師教育の質保証と評価に向けて - 一般社団法人全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会, 2014.6
- 6) 保健師に係る研修のあり方に関する検討会最終とりまとめ, 厚生労働省健康局長通知 2016.3
- 7) 地域における保健師の保健活動に関する指針厚生労働省健康局長通知「地域における保健師の保健活動について」別紙, 2013.4
- 8) 保健師活動指針活用ガイド, 公益社団法人日本看護協会, 2014.3

【表4-1】学外演習レポート整理

	家庭訪問からの学び			交流会での学び	JAXAでの学び	講演会参加からの学び	その他	
a	家庭訪問では、温かく迎えていただきうれしかった。	高齢の方にわかりやすく伝えること、相手を尊重した聞き方が難しかった。		農業の担い手がその発展のため、頑張っていることを学んだ。	ロケットを飛ばすために地域の人々の協力が必要不可欠であることを学んだ。	地域住民の参加が多く、意識が高いと感じた。	改めて人を支えることができるようになりたいと思った。	
b	家庭訪問では、温かく迎えてもらい、地域の強みや課題を見つけられることができた。	地域を観ること、知るこの大切さを学ぶことができた。地域を知るためには、住民の方々の生活を知ることが重要。	どうしたらわかりやすく相手に伝えることができるか難しさを痛感した。			人口減少や高齢化、今後の医療のあり方など学んだ。	死について改めて考えることができた。	
c	訪問は緊張したが、何もできない私たちを温かく迎えて下さり、うれしく充実した時間だった。	過疎、高齢化がすすむ肝付町で地域特性に応じた様々な保健活動を行う市町村保健師の姿を学ぶことができた。		こんなに住民の方々のことを考え保健師として活動される姿に改めて魅力を感じ、自分も市町村保健師を目指したいと強く感じた。				
d		地域住民から直接話を聞く方が、生活が目に見える、地域の方々と触れ合うことが大切だと学んだ。	保健師は地域の方々の思いをしっかりと聞き関係をつくる必要がある。	地域おこしをしている人や食生活改善推進員等地域のために研究している人を知ることができた。		終活の話や聞きに来る地域住民の多さも目についた。		
e	町の歴史を知る手段として、町民の方と話すこと。長年その土地で実際に暮らしてきたからこそ語れるものがあると感じた。	町民とのコミュニケーションや町をアセスメントするためにも、環境や人口構造を把握しておくことが大切。			町にある企業・会社と住民は支えあいの関係にあることをJAXAの見学で学んだ。	これからの医療や、世界と日本の医療・介護の違いを学ぶことができ、最期を迎える時にどうしたいのか考える必要があることを学んだ。		2日間で学内学習では学ぶことができない多くのことを楽しく学べた。
f	訪問を温かく迎えて下さり、集落の方の優しさを感じることができた。			若手農業従事者や地元企業の方が肝付町のために様々な視点から取り組んでいることを知った。	建設までの経緯に当時の町長や住民の方々の全面的な協力があった事、管制塔見学など印象深かった。	「その人のトータルの人生」を下げないような医療・看護を行っていく必要があると学んだ。	学外演習を通して保健師の役割は、「その人の自己決定を支える」という言葉が印象に残っている。	肝付町の歴史や現在取り組んでいる事業などを知ることができ、とても魅力の多い地域だと改めて感じた。
g	事前に肝付町について調べていたが、実際に行きわかったことが多かった。	保健師と地域住民の方との関わりや健康管理について学んだ。	地域の方から問診票の情報収集をする際、どのように聞けばよいか難しかった。	保健師として、地域住民の方の健康状態の把握や管理、思いを聞く役割がとても大切になることが分かった。	参加者が様々なカタチで肝付町を支えており、役割を持っていると感じた。	最期をどのように迎えるかというのを家族と話しておくことが大切であるとわかった。		
h	地域の方々に温かく迎えてもらい嬉しかった。	地域をよく知るため事前の地区踏査が大切。地域の特徴に合わせて、テレビ電話等様々な工夫があった。	質問内容をどうわかりやすく伝えればよいか難しかった。	そこで生活したいという思いを中心に支援していくことが保健師の役割のひとつ。				
i		地域を抽象的にとらえるのではなく、具体的に一つ一つを細かく見て自分の言葉で町を説明できるところまで知り尽くすことが地区踏査だと学んだ。	住民との信頼関係が大切なこと、また、話をする時には、相手が主体でありながらも言葉を使い分け、必要な事を聞くことを学んだ。	様々な職種の方が地域が良くなるように取り組み、情報を共有し一致団結していた。この連携がまちづくりには必要不可欠だと分かった。	肝付町ならではの場面をみるのができ純粋に楽しかった。普段全く関わることのないことにまじかにふれることができ特色を学ぶことができた。	雨の中、数多くの方が集まっていて、健康のために積極的に取り組み、参加している現状を見ることができた。	2日間多くの事を学び、改めて保健師というものがすばらしくやりがいのある仕事だとわかった。	
j	地域の皆さんが優しくH集落が大好きであることがわかった。	私が住んでいる所は家が多く近所付き合いがほとんどないがH集落は近所付き合いがとてもよいと感じた。	H集落は自然豊かで良いところだが自然災害も起こりやすく常に注意が必要だとわかった。	保健師は、物理的環境として地形や気候などの特徴を踏まえた上でのアセスメントが必要だと学んだ。	ロケットが打ち上げられる場で県内外の人々も訪れにぎやかになるので、多くの人に足を運んでほしいと思った。	町の人が雨の中来られていることに驚いた。死について家族の方と話し合う機会を作ったり私たちが話を聞くことも大切だと感じた。		



【表4-2】学外演習レポート整理

	家庭訪問からの学び	交流会での学び	JAXAでの学び	講演会参加からの学び	その他		
k	高齢者が得意な農業を肝付町に教える場を設けることで、生きがいや役割づくりにつなげ、子どもたちにも感謝の気持ちや地域への愛着を持ってもらえるのではと考えた。	保健師の話や様々な方との関わりの中で、肝付町の高齢者を守るように支えていくべきか、私達若者が手助けしなければならぬと感じた。イベントの場があれば是非ボランティアに参加したい。	一番重要視しなければならないのは、災害時、全員が安全に避難したり、すぐに情報が得られるような環境の整備を行う必要があると考えた。	水稲やJAXAの役割、見どころを詳しく知ることができ、この演習で一番楽しかった。	終活というテーマで人口減少や医療の現状を知ることができた。	発展してきた医療に頼らず、最後は本来の人間らしいことができなくなれば自然に死ぬことも格好良くてと気づくことができた。	
l	家庭訪問で一番印象に残ったのが、「私は今世界一幸せ」という言葉だった。	実際に地区踏査を行い、地域に行かないとわからない地域の特性を多く学ぶことができた。	H集落は交流が深く住民間が密であることから、そこがなかったり、強みやよいこと、マイナス面もあり、保健師はそういう時に話を聞く役目もあると思った。	肝付町を愛している保健師さんから案内をいただき、肝付町の課題だけでなく強みやよいところも多く見つけることができた。今回学んだことを夏の実習に生かしていきたい。	人口減少が年々みられる肝付町が、県内外から来る農業を始めたいという人の支援をして人口の確保と農業の担い手の確保や育成のために事業に取り組んでいると学んだ。		
m	家庭訪問では、住民の方々が温かく迎えていただき、緊張していたためとうれしかった。	肝付町には様々な歴史があり、最先端技術のテレビ電話を用いた高齢者の相談対応などの取り組みが行われていることを知った。	現在運行されている乗り合いタクシーは1日の便数が少ないため活用しにくいこと、閉じこもり予防、介護予防のため交通の利便性は大切ではないかと感じた。	「最期までH集落で生活したい」との発言もあつたので、保健師が住み慣れた地域で生活できるよう支援を行っていく必要があることを学んだ。	最期をどう迎えるか自己決定し、それを周囲に伝えておくことができた。	保健師は、対象と信頼関係を築き、本人の最期の迎え方に関する考えを聞いて、それが実現できるように支援する必要があるのではと感じた。	
n	家庭訪問では、初めて会う私達を、温かく迎えていた気持ちになった。		保健師と地域の方々の関係性を持ったが、少ない訪問の中で信頼関係を築くために1回1回の訪問を大切にされた。	水稲の研究発表で、地域診断と同じように分析され、より良い米を作るために努力されていると感じた。	ロケットを打ち上げるのたくさんの関係者が携わっていることを知った。医療従事者も関係していることを初めて知った。	「かつこよく老いて、かつこよく死のう」という言葉が心に残っている。	その実現のため、介護予防をしっかりし、人間らしく安らかに死んでいきたいと考えることができた。
o	保健師さんをはじめ、肝付町の方々が温かく私達を迎えて下さったこと、地域のつながりが一番印象に残った。	家庭訪問で、実際にH集落に住んでいる方から直接話を聞き、目で見たもの以外の事を知ることができた。	家庭訪問を通し、話をより理解するために地域を知る大切さ、違和感のない程度で質問することの難しさが課題となった。	はじめ緊張していたが地元の方と交流できた。水稲の研究発表を聞き色々な試みをしておいしいお米を作られていることも分かった。	JAXAが、なぜ内之浦にあるのかという疑問も解け貴重な経験となった。緊急時に備え医療関係者も携わっていることに驚いた。	今後の日本や鹿児島の医療のことを学ぶことができ、患者さんの意思をしっかりと聞き取り添っていくと思った。	
p	家庭訪問では、緊張している中、温かく迎えてくださり、とても楽しい時間を過ごすことができた。	実際に肝付町に行き、地元の方や保健師さんの話を聞いたり、見たりすることで学校では学ぶことができないことも学べた。	昨年の12月に電波がやっとながりが県外の家族と連絡が取れるようになったり、交流の幅が広がったのではないかと感じた。	肝付町の農業を活性化させるために、高齢の人たちだけでなく、若い年代の人々も活動し新たな提案を行っていると思った。	ロケット発射時には多くの観光客が来ることで、町に活気が出る。住民の理解を得ることが大切だと思った。	かつこよく老いてかつこよく死ねるためには、対象者の自己決定が必要であり、医療従事者が自己決定できるよう促すことが必要であると思った。	
q	家庭訪問での住民の方との関わり後は、H集落の印象が変わり、愛されている地域で助け合ったり優しさが基盤となる温かい地域だと認識した。	肝付町は歴史が深い町、住民との距離が近く、保健師は日ごろから連絡したり訪問し、今のよ様な信頼関係が構築されており、とても大きい存在だと認識した。	家庭訪問では、保健師を目指す私達にも不安心して暮らしてもらうためにサポートする力が大切ということも学んだ。		①前期高齢者に支える側に回ってもらう②後期高齢者の負担を小さくする③支える側の効率を上げる④外から入ってもらう①②に対して看護や保健が関わることではないかと考えた。	健康教育の重要性を再認識し、自分にできることはまず、家族の健康維持を目標に行動していきたい。「死」に対して前向きな考えができた。	祖母にも自分はどう生きたいかということを開き、家族で情報を共有し祖母の望む生き方を支えていきたいと思った。
r	初対面の学生を温かく迎えて下さり、住民の方の優しさがとても印象に残った。	家庭訪問においては、対象者との信頼関係やどんな相談にも対応できる知識が必要だと学んだ。		高齢者の方々が自分らしく生きていくために、自己決定を支援していくことが看護者の役割だと学んだ。	鹿児島島の医療や高齢化の現状を知り、これから看護者となっていく上での働き方を考えることができた。	今回の学びを今後の実習に活かして、看護者になってからも大切にしていきたい。	



# Aiming for an effective public health nurse education by regional cooperation(report.1) — a consideration from public health nursing “off-campus practicum in Kimotsuki ”—

Reiko Yatsuda<sup>1)</sup>, Mitsue Kakimoto<sup>1)</sup>, Yoshiko Shiomitsu<sup>1)</sup>, Yoshiko Nose<sup>2)</sup>

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

2) Community Comprehensive Care Center in Kimotsuki-town

Key words : regional alliance , public health nurse education , public health nursing ,  
o -campus practicum

## Abstract

In the year 2015, our collage changed the integrated curriculum to the elective one, and started practicum at public health institutes, local health centers, or public welfare organizations, in addition to the lectures on public health nursing. In the year of 2015, we carried out a survey of students' self-evaluations about their achievement levels, using “minimum requirements” created by JAPHNEI (Japan Association of Public Health Nurse Educational Institutions), and we confirmed that practicum enhances students' sense of achievement.

It is important to get students to have effective practical experiences in providing the public health nurse education. However, we have just 4 weeks to do the practicum and the regional activities students can go through vary within regions, depending on the implementations of field work by the public health nurses.

For these reasons, we worked in partnership with Kimotsuki-town where they conduct various healthcare activities based on the situation in each area and elicited cooperation from a public health nurse in the town. We went off to H settlement and conducted “off-campus practicum in Kimotsuki” to have for interviews with the local residents and learn community renovation collaborating with residents and the development healthcare activities appropriate to characteristics of the region.

Therefore, the following significations and effects of off-campus practicum are suggested: ① students can experience workflow of public health nurses that they perceive regional health problems and formulate policies to solve them, which leads to the understanding actual practices of public health nursing. ② off-campus practicum provides students with a good opportunity to consider the ways of “cooperation” and the importance of perceiving characteristics of the region or societal resource. ③ off-campus practicum provides students with an invaluable opportunity to consider how they work as a public health nurse to help residents with peace of mind in their home land in the coming aged society.

---